

日本における日麗関係史研究：1992～2016年

村井章介

はじめに

2017年9月16日、韓国春川市の江原大学校60周年記念館国際会議室において、韓日関係史学会25周年を記念する国際学術会議「韓日関係史研究の回顧と展望」が開催され、私は招かれて主題発表の一つを担当した。会議のプログラムは下記の通りである。

基調講演

孫承喆「韓日関係史学会25周年を迎えて」

主題発表（司会＝柳在春・韓成周）

金奎運「考古学より見た韓日関係—三国・古墳時代の韓日交流—」（討論＝徐程錫）

羅幸柱「古代韓日関係史研究の回顧と展望」（討論＝延敏洙）

韓文鍾「高麗後期・朝鮮前期韓日関係史研究の回顧と展望」（討論＝荒木和憲）

鄭成一「朝鮮後期（江戸時代）韓日関係史研究の回顧と展望」（討論＝張舜順）

玄明喆「開港期韓日関係史研究の回顧と展望」（討論＝金興秀）

村井章介「日本における日朝関係史研究（高麗時代）：1992～2016年」（討論＝李在範）

佐伯弘次「日本における中世日朝関係史研究—朝鮮前期—」（討論＝李薫）

崔永鎬「現代韓日関係史の回顧と展望」（討論＝柳芝娥）

総合討論（司会＝河宇鳳）

本稿は、上記発表の原稿論文¹に多少の修正を加え、それに「はじめに」の前半と「おわりに」を加えたものである。主催者から、発表でとりあげるべき研究文献の範囲を指定されることはなかったが、「日本における日朝関係史研究（高麗時代）」（以下「日麗関係」の語を用いる）のすべてを対象とすることは不可能なので、言語的には日本語で発表されたものに限る、時間的には韓日関係史学会が発足した1992年から2016年までの25年間に公表されたものに限ることにした。したがって、著者が外国人であっても日本語で発表されたものは対象とし、著者が日本人であっても外国語で発表されたものは対象としていない。

初出論文が著書・論文集等に再録されたような場合、再録書の刊年ではなく初出の年次に拠ったが、実際には再録書で内容を把握した場合もある。また、初出文献が外国語の場合は、日本語訳・日本語版の発行年に拠った。後掲の文献リストにおいて、年号に下線を施したものが初出の刊年、➡の後に記したのが再録書の書誌データである。

例：上川通夫「中世仏教と「日本国」」（『日本史研究』463、2001）➡同『日本中世仏教形成史論』（校倉書房、2007）

なお、2009年ころまでに発表された高麗前期を扱う研究については、森平雅彦「10-13世紀前半における日麗関係史の諸問題—日本語による研究成果を中心に—」（『第2期日韓歴史共同

¹ 『韓日関係史学会25周年記念国際学術会議 韓日関係史研究の回顧と展望』（東北亜歴史財団・韓日文化交流基金後援、景仁文化社製作、2017、非売品）に日韓両国語で所収。

研究報告書：第2分科会篇』2010、日韓歴史共同研究委員会）における整理がある²。この文章で森平は、高麗時代の研究は朝鮮時代とくらべて「およそ不活発」なうえ、その前期は後期とくらべてさえ「実に寥々たる有様」だと述べる（p.205）。しかしここ数年で状況はかなり変わってきており、とくに対外関係以外の分野で文献数が増加傾向にある。その他、留意すべき森平の指摘をいくつか掲げる。

「日本の対外関係史研究において一国史観の克服が志向され、海域史・海域交流史の視点が深まることにより、1990年代以降、日麗関係史研究にも新たな機運が生まれつつある。」（p.206）

「日朝双方の文献に録文の形で残された高麗の外交文書が注目されるが、その全文を丹念に読み解く基礎作業は、必ずしも十全ではない。大宰府に倭寇禁圧を求めた1227年の高麗全羅道按察使の牒を分析した近藤剛 [2008] の仕事³は、数少ない成果のひとつである。」（p.216）

「日麗関係を本格的に追究するならば、むしろ、宋、高麗、日本、契丹、女真、モンゴル、西夏、東南アジア諸国など諸民族・諸国家がおりなす当時の東方ユーラシアの全般的動向に注意しながら、そこに日麗関係を相対的に位置づけていく必要がある。」（p.217）

つぎに、上記の25年間に刊行されたこの分野における基本図書を、いくつか挙げておこう。対象は日本の対外関係史全般であるが、類書中もっともくわしく、かつ出典が明記され、補注も備わった年表として、対外関係史総合年表編集委員会編『対外関係史総合年表』（吉川弘文館、1999）がある。平安時代以前に限っては、さらに詳細な上に人や物の往来までも視覚的に示した田島公『日本、中国・朝鮮対外交流史年表（稿）一大宝元年～文治元年〔増補改訂版〕』（私家版、2013）がある。史料としては武田幸男編訳『高麗史日本伝：朝鮮正史日本伝2』（岩波書店、2005）を挙げておきたい。

I 通史・概説

[川添昭二1992・1994] は、本稿が対象とする25年間の初年に書かれた日本中世対外関係史の概論で、軽視されがちな高麗関係にもバランスよく字数を割いている。[田村洋幸1993] も、13世紀までの日麗関係を生産力を中心に経済史の視点からたどっている。しかし、両者とも12世紀以降の日麗交易の不振の原因を高麗の低生産力や商業未発達に求めるのは、証明されていない前提に基づく立論といわざるをえない。[関周一2010] は、外交権の所在を軸に平安期から南北朝期までを見通すが、日麗関係について独自の視点を設定してはいない。[佐伯弘次2011] の前半は、前期倭寇の時代の日麗関係を概観しており、倭寇禁圧を求めて来日した高麗使と日本側の対応に紙幅を割いている。[佐伯弘次2016] は蒙古襲来期から13世紀末までの主要な日麗関係史料（外交文書を中心とする）を全文紹介し、簡単なコメントを付したものである。[森平雅彦2008] は日麗貿易の消長を、「進奉」などの制度的・政治的枠組みや史料の残り方の偏りをも視野に入れて考えるべきと提言するが、高麗側からの海外進出の指向性が目立たないことをどう考えるかは、依然として難問のままである。[石井正敏2010a] は、宋・契丹（遼）

² この報告書には森平論文とペアになる李在範「高麗前期韓日関係史研究現況」が収められ、韓国での研究状況が整理されている。なお、李は今回の会議で私の発表に対する討論を担当した。

³ 「嘉祿・安貞期（高麗高宗代）の日本・高麗交渉について」（『朝鮮学報』207）を指す。

という大陸の国家や、女真海賊・対馬人・大宰府官人などの境界的な勢力との関係のなかに置いて、11世紀までの日麗関係を見通す。とくに1079年の請医事件については外交文書の表現に踏みこんで検討を試み、そこから日麗双方の大国意識の衝突を見いだしている。〔森公章2008〕も〔石井正敏2010a〕とはほぼおなじ範囲を対象とする通史で、典拠史料を丹念に掲げている点に特徴がある。

〔近藤剛2011a〕は、11世紀なかば～13世紀なかばの対日本外交について、その窓口となった機関や、中央への伝達と中央からの回答の形式を明らかにしたもので、12世紀末に高麗国内の治安悪化により対日本関係の業務が東南海都部署から金州防禦使へ移管された可能性が高いとする。〔森平雅彦2014〕は「事元期」を中心に、高麗の日本に対する応接・防衛の拠点を史料から洗い出し、その地政学的位置づけを考察する。とくに金海から合浦への重要拠点の移動を明らかにした点は成果である。

〔高橋公明2005〕は、外交文書の呼称を指標として、国家元首が直接に対峙する「慰勞詔書一啓」の時代から、10世紀以降太政官—大宰府が当事者となって高麗の官庁や宋の明州と「牒」をやりとりする時代へと移行したが、とくに日本では様式の如何に関わらず牒・牒状の語が外交文書の代名詞のように使われたとする。さらに〔森平雅彦2007〕は、元中書省から高麗王に送られる文書が、1280年を初見として「牒」式から「咨」式に移行することを指摘した。〔岡本真2007〕の後半は、高麗から日本への外交文書の様式が、1375年の交渉のあと交渉相手が今川了俊になったことを契機として、咨文から書簡へと変化することを指摘し、その形態が朝鮮時代に引き継がれてゆくという。

〔南基鶴2003〕は、日麗の相互認識を通史的に跡づけたもので、その前半期は、支配層レベルでは自己を上位に置く華夷意識の視線で相手を見ていたが、高麗側が通交関係の実現に積極的だったのに対して、日本側は観念的な自尊意識から拒否的だった、と整理する。しかし、双方が直接ふれあう北九州地域や金州地域では、中央とは異なる開明的な相互認識が育っていたことにも留意する。しかし後半期になると、モンゴル東征と倭寇という、たがいを敵対的關係へと駆り立てる歴史事象により、相手に対する硬直した否定的認識が、社会層の如何をとわず支配的になっていった、とする。

II 平安時代の日麗関係

〔石井正敏2000〕は、997年の奄美海賊（南蛮賊徒とも）による九州各地襲撃事件が、中央の貴族層によって「高麗来襲」と誤解された一件を素材に、事件の直前に「日本国を辱しむるの句」をふくむ高麗牒状が到来しており、これが伏線となったこと、高麗をいつ襲ってくるかわからない「敵国」と見る意識が、鎌倉時代に至るまで保持され続けたことを論じる。

〔村井章介1996〕は、1019年の刀伊の入寇に関して日本に残った史料（とくに『小右記』）の特質を論じ、高麗側が友好的な態度で被虜人を取り戻して送還したのに対して、日本側の受けとめ方は、「敵国」高麗に国内の衰亡を覚られることを恐れ、その軍備状況に異常な関心を示したことに注目した。〔石井正敏2007a〕は、刀伊船に掠われた2女性の証言中、高麗の兵船についての部分を、写本の文字遣いにさかのぼって検討し、先行研究の誤積を正して、上下二段の構造を持ち、上甲板には櫓、下甲板には楫が懸けられていたことを明らかにした。さらにこの結論を朝鮮船舶史に位置づけ、「板屋船」への影響関係に説き及ぶ。〔篠崎敦史2013〕は、初期の高麗は日本との国交樹立をめざす姿勢をとったとされてきたが、じっさいはむしろ疎遠

なもので、刀伊の入寇のさいの日本尊重は、契丹との交戦中ゆえ対立を避ける目的があったとし、できごとを日麗2国間のみで考えることの狭さを強調する。

[近藤剛2011b]は、1079年に文宗の病を治す医師の派遣を求めた大宰府宛「高麗国礼賓省牒状」(『朝野群載』所収)の署名部分を、高麗の礼制や同時代の他の事例と突き合わせて詳細に検討し、礼賓省を大宰府の上位に置く自尊意識と、医師派遣の要請にあたって敬意を表す必要とが同居していることを読み取っている。おなじ事件を取り上げた[篠崎敦史2015]は、東アジアの外交文書についての知見をふまえて、高麗側からの礼賓省牒は平行文書、日本からの返牒は下達文書の様式であったとし、宋からたびたび医師が来ているなかで高麗が日本へ要請した理由は、契丹との関係の変化で宋との交通が不可能になった場合に備えてであった、と推論する。

[近藤剛2015]は、藤原伊通の教訓書『大槐秘抄』の対外関係記事の本文校訂を踏まえて、つぎの2点を論じる。①平清盛大宰大弐在任中の「高麗に事あり」とは、1160年に対馬の採鋳夫や商人が金海府によって拘束された事件を指し、それはまた「李文鐸墓誌」の記す日麗間に外交文書が往来した「辺事」とも同定できる。②「制」とは国法としての渡海制ではなく、宋商の活動の変貌・拡大に伴って日本からの高麗渡航者が「対馬国人」に限定される趨勢のなかで、対馬島司が出した渡航管理令と考えられる。[小峯和明2006]は、大江匡房の『対馬貢銀記』述作の背景に、匡房が大宰大弐として赴任中に起きた対馬守源義親の叛逆事件を想定し、さらに対馬の銀採掘に高麗の勢力が容喙していた状況までがからんでいたという。[李領1999a]は、11世紀末以前はひんぱんに高麗を訪れていた日本商船が、高麗の政治的混乱を避けて宋へ直航するようになった、とする森克己の説を批判し、商船が寄港を避けるほどの混乱はなく、西北方の女真勢力の動向を警戒する高麗が、日本船を開京近海から遠ざけるために金州での応接に限定した結果だとする。

[渡邊誠2007]は、平安貴族の対外意識を排外的とのみ評価してきた通説を批判し、異国牒状への対応の基本は中央政府で調製した大宰府牒を送付するというもので、高麗に対する「敵国」意識も、国際関係のなかで現実に脅威が認識されたときにのみ表面化している、と指摘する。独善的な自尊意識が優越するようになるのは、むしろ12世紀に入ってからだという。[渡邊誠2016]は、宋が契丹と対峙しつつ国際秩序を再構築しようとする動きのなかで高麗の日本認識や対日姿勢を位置づけ、光宗朝の自立志向や、日本側の再三の拒絶にもかかわらず交渉を継続したことに注目する。

Ⅲ 仏教界の交流と宋海商の活動

[上川通夫2001]は、宋仏教の影響にばかり目をむけてきた従来の仏教史研究を批判して、院政期の日本が高麗義天の統藏経を通じて遼仏教を導入したことを抜きにしては、日本中世仏教の成立は語れないと主張し、こうした日本の国家や仏教界のスタンスを、「擬似的汎東アジア性」という概念で説明する。[横内裕人2002]は、高麗義天の統藏経が、院権力を後ろ盾とする仁和寺・東大寺僧が宋商に依頼することにより請来されたことを、丹念に洗い出し、宋・高麗が日本を従属的地位に組みこもうとする動きを警戒して、僧侶の入宋に頼らずにアジア仏教の導入を図ったものと解する。[保立道久2004]は、上川・横内の議論を受けて、院政期の日本が宋・遼・高麗の仏教を国制的枠組みに位置づけたこと、なかんずく義天統藏経導入の意義を強調する。[横内裕人2008]は、遼・高麗仏教とその日本への影響に関する研究史を義天

版を中心にたどったものだが、保立論文への言及はない。日本と高麗がおたがいの仏教を参照しながら、その存在を黙殺しあっている、という指摘には考えさせられる。

[末木文美士2014]は、京都高山寺における典籍調査をふまえて、同寺には義天の続蔵経を経由して入った遼の著作が多く含まれていることを指摘し、巻末に「高山寺所蔵高麗版続蔵関係写本一覧」を掲げる。高麗版を南宋で写したり復刻したりした本が日本の高山寺にあることは興味ぶかい。[馬場久幸2016]は、日本における高麗版大蔵経の遺存状況を網羅的に洗い出し、それらが室町～江戸時代に日本および琉球の社会にどのように受容され、活用されていったかを展望する。影印本・版本の書誌学的検討や関係研究文献目録も付いており、今後の研究の基本となるべき書である。

[榎本渉2008]は、日宋・日元交通における高麗の位置を測定するという視角から、入宋・入元僧の関係史料を洗い、高麗渡航自体を目的とする者は皆無に近く、高麗は海難による漂着地や東シナ海航海の目印としてしかあらわれないことを確認する。行論中、元からの帰途嵐に遭い高麗を経て1324年に加賀に帰着した大智が、1323年明州を出港したかの「新安沈船」の乗客だったとする[村井章介2006]の説を批判して、大智の高麗漂着は1321年だった蓋然性が高いとする。

[原美和子1999]は、高麗王子義天と宋の師僧との通信を福建海商集団のネットワークが担ったことをふまえ、同様の人的結合が義天の高麗続蔵経の日本輸入においても機能しており、日麗間においても、特別な文物や情報の入手は抜きんじた情報網をもつ宋商人に頼るところが大きかったとする。続いて[原美和子2002]は、勝尾寺縁起に見える「百済国」の皇后が990年に宋商周文徳・楊仁紹に託して観音像などを勝尾寺に送ってきた、という説話をとりあげ、完成が13世紀前半に下るこの話から、9世紀末に宋商が日麗間の媒介を担った史実を読み取ることはできないが、13世紀の人々が宋商を朝鮮半島から特別な文物をもたらす存在として意識していたことは認めてよい、と論じる。[原美和子2006]は、11世紀以降宋海商の交易活動が国家間関係から相対的に自立し始め、日本・高麗など相手地域ごとに専門化しつつも、行憑発給地の明州・杭州や住蕃貿易の基地博多などを結節点に海商ネットワークを作り、日麗間の往來の媒介者となるとともに、遼へも進出していった、と論じる。

IV 鎌倉前期の日麗関係

[李領1995]は、1206年以前から1263年以降に存在が確認される日麗間の「進奉礼制」を、平氏が大宰府を掌握していた時代に、大宰府の関与のもとで対馬島司と高麗側地方官庁との間に成立した、公的かつ恒常的な関係だとする。「進奉礼制」を正面からとりあげた初めての本格的な研究だが、その成立を1169年に特定するのは無理がある。[溝川晃司2003]は友好と憎悪、地方勢力と中央政府といった複眼的視野から、主として[李領1995]を収める同『倭寇と日麗関係史』（東京大学出版会、1999）を論評する。

李領が重要史料とした2通の外交文書、①1206年の対馬島宛高麗国金州防禦使牒と②1227年の大宰府宛高麗国全羅州道按察使牒を掘り下げて分析したのが、近藤剛である。[近藤剛2010]は、①の信頼できる本文を最善本と認められる『平戸記』中院本を底本に作成し、これを踏まえて、「進奉礼制」とは来航日本人の方物献上行為に対して高麗側で設定したものと解した。[近藤剛2009]は、①の文中に見える「廉察使」の語を「按察使」の別称、具体的には慶尚道按察使を指すとする。[近藤剛2008]は、②とその関係史料を深く読んで、この年日麗間に、

承存を正使として倭寇禁圧を求めた交渉に続いて、朴寅を正使として新たな通交協約を求める交渉があり、その結果結ばれたのが「年一回、船二艘以内」という制限規定だった、と論じた。〔近藤剛2010〕とあいまって、この規定が「進奉礼制」の最初から存在したわけではなかった、という主張となる。

②の牒は写本の質が悪く解釈がむずかしいため、諸説乱立の状況だが、最大の謎は慶尚道の金海府で起きた対馬島民による略奪事件への抗議を、なぜ全羅州道按察使が行なったのかである。本史料に対してもっとも詳細な検討を試みた〔近藤剛2008〕でも、この点はスルーされている。『百鍊抄』安貞元年（1227）7月21日条によって「対馬島人が全羅州を襲ったことを抗議する高麗国全羅州道按察使牒」と解する向きもあるが、『吾妻鏡』に掲げる牒から事件が全羅道で起きたとするのは無理である。〔高銀美2012〕は、大宰府守護所牒が外交文書として高麗へ送られたいくつかの事例を検討し、その機能は少弐氏が管轄する守護国に限定されたものでなく、幕府が掌握する外交権の具体的な行使だったと論じ、その始まりを上記②の交渉における少弐氏の返牒に求める。

藤原定家書写の『長秋記』の紙背にある高麗・渤海・東丹国の名が記された書状について、〔田島公2001〕は1226～7年の「倭寇」をめぐる高麗との外交問題にからんで、定家が呈した質問に対する某の回答と推定した。これに対して〔石井正敏2007b〕は、朝廷でその問題が議論されるより前に書状が書かれていることを示し、対案として、1225年に定家が『源氏物語』の校訂・書写作業を進めるなかで発した、同物語の「高麗人（こまうど）」に関連する質問への回答書だとする。これに従えば、同書状は鎌倉期日麗関係の史料とはいえなくなる。また『吾妻鏡』には、1224年に「高麗人乗船」（『百鍊抄』には「異国船」とある）が越後寺泊に漂着したことが記され、乗員が持っていた銀筒に書かれていた4文字が写されている。この銀筒は金朝発行のバイザ（旅券）で、文字は花押と「国の宝」を意味する3字と解読されていたが、〔川崎保2002〕はそれに加えて、中世の出土銭に占める金銭の比率を遺跡ごとに洗い出し、件の船が女真船で、日本海を横断して来た可能性が高いとした。

〔高橋昌明2004・2010〕は、唐末の節度使と五代王朝、高麗武人政権、日本の幕府を「武人政権」という観点から比較し、「武」が全面開花せず宋という「文」優位の官僚制国家へと帰着した中国を「正常で直線的な発展」とする一方、日本中世の封建化を、辺境性が世界帝国との接触により逸脱・飛躍・偏向させられたいびつな展開と評価し、高麗はいずれの性格ももつが距離の近さゆえに中国的な性格が優勢だという。結論のみならず評価の基準を「文（儒）の普及、確立度」に置くことについても、賛否両論あるところだろう。

V モンゴルの脅威のもとで

〔南基鶴1996〕は、蒙古襲来後の日本の軍事的対応、外交、思想状況などを俯瞰するなかで、高麗が基本的に友好的な態度で日本に臨んだのに対して、日本は元に対していたずらに武断的な姿勢を貫き、元を中心とする国際秩序のなかに入るという可能かつ賢明な態度を取らなかった、とする。蒙古襲来の影響は日元関係よりむしろ日麗関係において直接かつ深刻だ、との評価は、日本での研究の虚を衝くものがある。〔森平雅彦2011〕は、モンゴル帝国の政治体制についての知見をふまえて、いわゆる「事元期」高麗の政治や社会を平易に述べた書で、従属か抵抗かといったありきたりの構図にとらわれず、複雑な国際関係のなかで高麗が歩んだ道をたどる。日本との関係でも、元に対して自己の存在理由を「威鎮東方極辺未附日本国辺面勾当」

と説明しつつ、他方で元の言いなりでない独自のアプローチを試みたことが指摘される。[森平雅彦2015]は、モンゴル東征を1268年から1294年までの幅でとらえ、その間を7つの時期に区分して、戦争・戦争準備の概略を述べ、それぞれの期における高麗側の軍需負担を、品目や種類別にできるかぎり定量的に把握することを試みる。さらに軍需調達的方式を概観して、直接生産者の経営基盤を破壊するような収奪は避けられ、俸禄や備蓄の転用や元からの供与に比重があったとする。

モンゴル東征にからむ日麗関係については、従来知られていなかった史料が複数紹介され、大幅な進展があった。[張東翼2005]は、内閣文庫と京都大学図書館に所蔵される近世の写本『異国出契』から、1269年の大蒙古国中書省牒（日本国王宛）と高麗国慶尚晋安東道按察使牒（日本国太宰府守護所宛）を見いだして紹介した。原態をかなりの程度留めており、見逃されてきたのが不思議なほどの重要史料である。張は1266年の最初の国書と比較して、「より具体的かつ若干の脅迫性を備えている」と評している。なお、『異国出契』には1266年のモンゴルおよび高麗の国書を始め、多くの重要な外交文書の写しが含まれており、今後の研究の進展が待たれる。

張の史料紹介が呼び水となって、当該期の外交文書についての史料学的検討があいついだ。[植松正2007]は1266年から1270年までに元・高麗・日本間を往来した外交文書群を一連の流れとしてとらえ、共通する語彙・表現に注目し、最後に張の紹介した2通について、植松なりの翻刻・読み下し・現代語訳を掲げている。[荒木和憲2008]は、上記の按察使牒への返答として用意されたが結局送られなかった1270年の高麗国慶尚晋安東道按察使宛日本国大宰府守護所牒について、従来より知られていた『本朝文集』本を『異国出契』本と校合して、可能な限り原態に近いテキストを作成した。[石井正敏2011]は、石井自身が1978年に紹介して日韓の学界に大きな反響を呼んだ、三別抄に関わる「高麗牒状不審条々」についての再論で、その間に日韓の学界で発表された諸説を丁寧に検討し、基本的に自説を再確認している。同史料の現時点における研究状況をつぶさに知ることができる。[石井正敏2014]は、『元文類』所引『経世大典』逸文中の「日本条」の全文を検討し、かつ従来知られていなかった1275年の大元皇帝国書の書き出しと文末の文言を紹介し、元皇帝国書に古文書学的な検討を加えている。[植松正2015]は、1280年代以降の元・高麗の対日本外交をとりあげ、普陀山関係者の提案を受けて実行されたところに特徴を見いだしている。末尾で、『金沢文庫文書』『金沢蠹余残編』『高麗史』にある1292年の高麗国王書簡に詳細な検討を加えて、校訂原文・訓読・翻訳文を作成し、さらに高麗使金有成による部分的な改竄の可能性を示唆する。

[李領1999b]は、モンゴルの日本経略をめぐる高麗の三つの政治勢力、すなわち附元勢力・高麗朝廷・反元勢力の動向を、趙彝・李蔵用・三別抄にそれぞれ代表させて論じたもので、日本と最短距離にある金州や巨済島の地域的特質をふまえた立論が興味ぶかい。[張東翼2016a・b]は、モンゴル東征で高麗軍の指揮を執った2人の人物、金方慶と洪茶丘についての評伝で、2人の対照的な政治的立場のからみあい描かれている。[太田彌一郎1995]は、モンゴル使として高麗・日本を訪れた女真人趙良弼に関わる2つの碑文—良弼の出身地に立つ石碑「賛皇復県記」と『元朝名臣事略』趙良弼伝所収「野齋李公（李謙）撰墓碑」—をおもな材料として、日本僧桂堂瓊林が南宋の使者として大宰府に赴き、高麗・耽羅の反元勢力（三別抄）と連携して良弼の使節行を妨害した、という重大な史実をあぶりだした。[山本光朗2001]は趙良弼のくわしい評伝で、彼は1260年という早い時期から高麗と接触し、日本・モンゴル間に挟まれた高麗の苦境をよく知っていた、という。日本史からは目の届きにくい詩文や碑銘を使い、とく

に「野斎李公撰墓碑」に依拠するところ大きいのが、太田論文への言及はない。

[南基鶴1997]は、モンゴル東征期の高麗の日本観を支配層・民間・三別抄を問わず日本を寇賊視するものととらえ、三別抄の姿勢に対日観の変革をみる村井章介の説を「安易かつ短絡的な解釈」と退ける。もう少し地域や置かれた立場の違いによる変異の可能性を見てほしい気がするが、前出の[南基鶴2003]では、中央と境界地域との認識の差も視野に入れている。

VI 倭寇と日麗交渉

1366年に高麗が倭寇の禁圧を求めて日本に送った外交文書3通（醍醐寺報恩院文書）とその関係史料について、2007年以降あいついで論文が発表された。まず[張東翼2007]は、『異国出契』所収の写しで原本を補った上、恭愍王の反元自主政策に関連させて理解を試み（[李領2008a]もおなじ視角）、征東行中書省咨文とセットになった劄付を使節団が日本のある官府に提出した文書との説を立てた。[岡本真2007]は、その前半で、咨文・劄付をもたらした金竜より少し遅れて来日した使者金逸（金一とも）を、高麗国王名の外交文書を携えた使者だとした（[李領2008a]もおなじ理解）。[李領2008a]は、この使節派遣に元の意向はまったく働いておらず、文書が征東行省名で送られたのは高麗が日本を威圧するための偽装だと主張した。[藤田明良2008]は、劄付を掲げての『太平記』の語りを諸史料によって裏づけるという視角から、元・高麗の帝室・王室における暗闘や、元・麗・日の禅僧ネットワークの活発な動きを詳述する。

以上の諸説を受けて、[石井正敏2009]は、1366年に倭寇禁圧を求めて来日した高麗使に関わる史料、前田育徳会尊経閣文庫蔵『異国牒状記』を詳細に検討した結果、官務小槻兼治が作成した勘例（古代以来の異国牒状に対する日本側の対応の先例を書き上げたもの）をもとに、近衛道嗣（または二条良基）が後光厳天皇に献上したかな交じり文の意見書で、高麗使が帰途につく直前の1366年6月に書かれたものだとする。さらに[石井正敏2010b]では、3通に古文書学的な見地から詳細に検討を加え、劄付に関する張説、使者の構成に関する岡本・李説を退けた。征東行省名義の意図については、元の威光の利用以外に、書き出しの「皇帝聖旨裏……」の文言が高麗国王を指すかのように意図的にふるまうことで、日本に対する名分上の優位を確保しようとした点に見いだした。金竜・金逸は本来同一の使節団だったとする推測が示されているが、なお残された問題があることも明記されている。

[関周一2015]は高麗末期の対日使節の特徴を、派遣先は今川了俊・大内義弘、派遣目的は倭寇禁圧要請と被虜人の刷還とまとめている。[張東翼2016c]は元の第二次東征以降高麗滅亡までの、倭寇問題を中心とする外交交渉を年表にまとめて概述し、これとは別に文化面での交渉・往來の事例をあげ、日本所在の高麗時代の文化財を倭寇の略奪物とほのめかしている。[李鍾黙2002]は使臣羅興儒・鄭夢周や日本僧永茂・守允らによる高麗末の詩交の事例を紹介する。[桑野栄治2015]は、朝鮮朝建国者李成桂の簡潔な伝記で、明朝との複雑な政治的関係や外交交渉、倭寇の軍事的脅威のなかで、どのような基盤のもとにどんな経緯を経て、李成桂が国家の頂点に上り詰めるにいたったのかを描く。鋼鉄の意志というより、ためらいがちな悩み多き人間性が印象的である。

高麗末の倭寇の実体をどう考えるかは、学界で意見が分かれている。1987年に倭寇の主体を高麗・朝鮮人とする田中健夫・高橋公明の説が登場して以来、韓国ではこれへの反発が強く、とくに李領が精力的に論陣を張っている（後述）。しかし日本でも[浜中昇1996]が疑義を呈

している。浜中は、田中・高橋説の根拠となっている1446年の李順蒙上書の「倭人不過一二」という文言は信が置けない、また経営破綻した農民や禾尺・才人という賤民が倭寇と連合したとする見方には根拠がないとし、倭寇の本質を境界性に求める村井章介の議論に対しても、倭寇に協力した高麗人や朝鮮出自の倭人がいたところで、倭寇の本質とは無関係だと退ける。[村井章介1997]も浜中同様李順蒙上書や禾尺・才人＝倭寇説を批判するが、他方で、境界空間に対する高麗国家の掌握は徹底しておらず、そこを生活の基盤とする辺民・賤民と倭人の交じりあいを排除しきれない、と主張する。[藤田明良1997]は、明初に浙江の舟山群島で起きた「蘭秀山の乱」に関する興味ぶかい朝鮮史料、『吏文』所収洪武3年10月9日明中書省咨を紹介した。そこには、乱の主謀者の一人林宝一が濟州島を経て高麗全羅道の沿岸・島嶼部に逃れ、「洪万戸」「高伯一」などの住民らと交じりあっているようすが記されている。この海域にはむろん倭人も出沒していた。国家支配の届きにくい境界空間の流動性・多民族性を、ビビッドに見ることができる。[藤田明良1998]は、宋にもっとも近い黒山島に対する朝鮮歴代王朝の支配の試みを取りあげる。

浜中説は倭寇は日本人だとするのみで、その社会的実体について積極的な提示がない。この点に踏みこんだのが李領である。[李領1999c]は、倭寇を戦闘能力に優れた軍隊そのものと特徴づけ、九州の戦乱の過程で南朝方や少弐氏の武士団が兵糧獲得を目的に朝鮮沿海部を劫奪したものとする。[李領1999d]は、倭寇の主体＝高麗・朝鮮人説の批判、『高麗史』が倭寇史料として客観的かつ正確であることの検証、『高麗史』の複数の倭寇記事を地理的に関連づけながら読み直すこと、などを試みている。[李領2005]は、1380年に倭寇が高麗水軍の火砲により大打撃を受けた「鎮浦口戦闘」を、歴史地理学の手法を用いて詳細に復元する。[李領2008b]は、1377年の徳叟周佐書状にみえる「西海一路九州乱臣」と「西辺海道頑民」を倭寇の二大構成要素と理解し、後者の例として「有浦文書」にあらわれる肥前松浦党の武士たちをあげるが、同文書に倭寇との関係を示すようないかなる文言も見いだすことはできない。それにしても、「鎮浦口戦闘の存在自体を信じない……日本の倭寇研究者たち」とは誰なのだろうか？高麗に海上勢力は存在しない、となぜ断言できるのか？高麗の国家機構が全国のあらゆる地域・階層を支配の対象として確実に把握していたとする一方で、高麗軍が装備・紀綱・訓練度等の諸点で倭寇に対抗できないほど弱体だったとする理解は、整合的なのだろうか？

[孫承詒2011]は、倭寇の構成については李領とほぼ同様の理解に立ちつつ、被害者の苦しみの実相を語る史料として、1434年に頒布された『三綱行実図』（忠臣・孝子・烈婦それぞれ110名の事蹟を絵・解説・詩のセットであらわしたもの）にふくまれる、倭寇に屈しなかった烈女7件、孝子2件の記事を紹介する。[村井章介2011]は、「倭寇は日本人か朝鮮人か」という論の立て方自体を疑問視し、民族的区分に収まりきれない境界性こそ倭寇という集団の特徴と見る立場から、1350年の発生当初はそれ自体が境界空間である対馬・壱岐・松浦の三島倭人が倭寇の主体だったが、早い時期から朝鮮半島沿海や島嶼の人々を巻きこみ、行動範囲が広がるとともに政治性を帯びてくる、と理解する。

おわりに

「はじめに」で2010年時点での森平雅彦の指摘を3つ紹介したが、それらは現時点でも基本的にあてはまりそうだ。とくに2番目の外交文書研究は、初発期倭寇、元の日本征討、庚寅以来倭寇の3つをおもな対象として、石井正敏・近藤剛・張東翼の3人を中心に、めざましい進

展をみた。これに関連して、高橋公明・岡本真による外交文書の様式変化への見通し、李領・植松正・荒木和憲・高銀美による外交文書読解の深化も注目される。新史料の発見と既知史料の読み直しが精力的に進められ、あらたな歴史像を結んでいくようすは、日麗関係史を超える研究領域に置いてみても、光彩を放っている。近藤が石井の門下生であることをふくめると、この分野における石井の存在の大きさはきわだっている。張による元・高麗の日本宛外交文書の発見は大きな反響を呼んだ。

2 国間に視野を限定せず東方ユーラシアのなかに位置づける課題に関しては、平安後期の日麗関係の背後に契丹の動向を見いだした篠原敦史・上川通夫・横内裕人、元・高麗の対日交渉の妨害を試みた南宋の動きに注目した太田彌一郎が挙げられるが、まだ端緒的な段階にある。海域史・海域交流史の視点についても、媒介者としての宋商人について原美和子、島嶼の役割に注目する藤田明良、倭寇・倭人を境界人としてとらえる村井章介らの仕事があるが、近年やや停滞ぎみであり、また海域世界への高麗人の関与を認めない李領ら韓国側の研究との溝は依然として深い。

日韓相互認識は高麗以前から現在に至る根ぶかい問題で、競合関係にある隣人間の宿命のようにも感じられる。国際環境の変化による意識のゆらぎを論じた南基鶴・渡邊誠や、宋への尊崇意識のかけでたがいなを黙殺しようとする仏教者の意識のあり方を指摘した横内・榎本渉が注目される。末木文美士・馬場久幸らによって着手された仏教史料の探索が研究の基盤を作ってくれるだろう。

事件の生起した現場を押さえたうえで史料を読むことはますます重要である。高麗の対外拠点の変遷を論じた森平・近藤、倭寇の活動現場を精力的に探查した李領に、その息吹が感じられる。とりわけ朝鮮半島西南沿岸海域は、屈曲の多い海岸線と多島海に加え、世界でも指おりの潮汐差という厳しい自然条件をもつ。倭寇の内実の理解にも関わるが、ここでは当海域で沈んだ高麗時代の船から発見された木簡群に注目しよう。文字史料の乏少をかこつ高麗史研究にあって垂涎の新史料だが、そこから窺えるのは、中央有勢者が個別に地方に領地を所有するという社会のしくみで、日本中世の荘園制を彷彿とさせる⁴。日麗関係を直接に語る史料ではないが、高橋昌明による武人政権比較論に加えて、社会経済の視角から両者を比較する視点が切り拓かれることを期待したい。

付表：1992～2016年の日麗関係史研究（編著者名の50音順）

荒木和憲「文永七年二月付大宰府守護所牒の復元—日本・高麗外交文書論の一齣」（『年報太宰府学』2、2008）

石井正敏「日本・高麗関係に関する一考察—長徳3年（997）の高麗来襲説をめぐって」（中央大学人文科学研究部編『アジア史における法と国家』中央大学出版部、2000）➡『石井正敏著作集3 高麗・宋元と日本』（勉誠出版、2017）

石井正敏「『小右記』所載「内蔵石女等申文」にみえる高麗の兵船について」（『朝鮮学報』198、2007a）➡同上

⁴ 図録『新発見の高麗青磁 韓国水中考古学成果展』（大阪市立東洋陶磁美術館、2015）。とくに崔鉉植の論文「泰安水中引き揚げ船出土の木簡から見た高麗時代の租税運送」参照。ほかに、橋本繁「沈没船木簡からみる高麗の社会と文化」（国立歴史民俗博物館・小倉慈司編『古代東アジアと文字文化』同成社、2016）。それにしても、沈船事例が高麗時代に集中し、朝鮮時代にはないのはなぜだろうか？

- 石井正敏「藤原定家書写『長秋記』紙背文書「高麗渤海関係某書状」について」(『(中央大学)人文研紀要』61、2007b) →『石井正敏著作集1 古代の日本列島と東アジア』(勉誠出版、2017)
- 石井正敏「『異国牒状記』の基礎的研究」(『中央大学文学部紀要』史学54、2009) →『石井正敏著作集3 高麗宋元と日本』(勉誠出版、2017)
- 石井正敏「高麗との交流」(荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係3 通交・通商圏の拡大』吉川弘文館、2010a) →同上
- 石井正敏「貞治六年の高麗使と高麗牒状について」(『中央大学文学部紀要』史学55、2010b) →同上
- 石井正敏「文永八年の三別抄牒状について」(『中央大学文学部紀要』史学56、2011) →同上
- 石井正敏「至元三年・同十二年の日本国王宛クビライ国書について」(『中央大学文学部紀要』史学59、2014) →同上
- 植松正「モンゴル国国書の周辺」(『(京都女子大学史学会)史窓』64、2007)
- 植松正「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」(『東方学報』京都90、2015)
- 榎本渉「入宋・日元交通における高麗一仏教史料を素材として」(科研報告書『中世港湾都市遺跡の立地・環境に関する日韓比較研究』東京大学大学院人文社会系研究科、2008)
- 岡本真「外交文書よりみた14世紀後期高麗の対日本交渉」(佐藤信・藤田覚編『前近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社、2007)
- 太田彌一郎「石刻史料「賛皇復県記」にみえる南宋密使瓊林について—元使趙良弼との邂逅」(『東北大学東洋史論集』6、1995)
- 上川通夫「中世仏教と「日本国」」(『日本史研究』463、2001) →同『日本中世仏教形成史論』(校倉書房、2007)
- 川崎保「『吾妻鏡』異国船寺泊漂着記事の考古学的考察」(『信濃』54-9、2002)
- 川添昭二「中世における日本と東アジア」(『福岡大学総合研究所報』147・156、1992・1994) →同『対外関係の史的展開』(文献出版、1996)
- 桑野栄治『李成桂』(山川出版社 世界史リブレット人、2015)
- 高銀美「大宰府守護所と外交」(『古文書研究』73、2012)
- 小峯和明『院政期文学論』(笠間書院、2006)：「『対馬貢銀記』の世界—異文化交流と地政学」
- 近藤剛「嘉禄・安貞期(高麗高宗代)の日本・高麗交渉について」(『朝鮮学報』207、2008)
- 近藤剛「泰和6年(元久3・1206)の対馬島宛高麗牒状にみえる「廉察使」について」(『中央史学』32、2009)
- 近藤剛「『平戸記』所載「泰和六年二月付高麗国金州防禦使牒状」について」(『古文書研究』70、2010)
- 近藤剛「高麗における対日本外交条件の処理過程について」(中央大学人文科学研究部編『情報の歴史学』中央大学出版部、2011a)
- 近藤剛「『朝野群載』所収高麗国礼賓省牒状について—その署名を中心に」(『中央史学』34、2011b)
- 近藤剛「12世紀前後における対馬島と日本・高麗—『大槐秘抄』にみえる「制」について」(中央大学人文科学研究部編『島と港の歴史学』中央大学出版部、2015)
- 佐伯弘次「14-15世紀東アジアの海域世界と日韓関係」(『第二期日韓共同研究報告書』第二分科会篇、2011)

- 佐伯弘次「蒙古襲来以後の日本の対高麗関係」(『史淵』153、2016)
- 篠崎敦史「刀伊の襲来からみた日本と高麗との関係」(『日本歴史』789、2013)
- 篠崎敦史「高麗王文宗の「医師要請事件」と日本」(『ヒストリア』248、2015)
- 末本文美士「高山寺所蔵高麗版続蔵写本に見る遼代仏教」(『平成25年度高山寺典籍文書総合調査研究報告論集』2014)
- 関周一「鎌倉時代の外交と朝幕関係」(阿部猛編『中世政治史の研究』日本史史料研究会論文集 1、日本史史料研究会企画部、2010)
- 関周一「高麗王朝末期・朝鮮王朝初期の対日使節」(『年報朝鮮学』18、2015)
- 孫承詒「14-15世紀東アジア海域世界と韓日関係—倭寇の構成問題を含む」(『第二期日韓共同研究報告書』第二分科会篇、2011)
- 高橋公明「外交文書を異国牒状と呼ぶこと」(『文学』6-6、2005)
- 高橋昌明「東アジアの武人政権」(歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座3 中世の形成』東京大学出版会、2004) →同『東アジア武人政権の比較史的研究』(校倉書房、2016)
- 高橋昌明「比較武人政権論」(荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係3 通交・通商圏の拡大』吉川弘文館、2010) →同上
- 田島公「冷泉家旧蔵本『長秋記』紙背文書に見える「高麗」・「渤海」・「東丹国」(上横手雅敬編『中世公武権力の構造と展開』吉川弘文館、2001)
- 田村洋幸「高麗における倭寇濫觴期以前の日麗通交」(『(京都産業大学経済経営学会) 経済経営論叢』28-2、1993)
- 張東翼「1269年「大蒙古国」中書省牒と日本側の対応」(『史学雑誌』114-8、2005) →同『モンゴル帝国期の北東アジア』(汲古書院、2016)
- 張東翼「1366年高麗国征東行中書省の咨文についての検討」(『(関西大学アジア文化交流センター) アジア文化交流研究』2、2007) →同上
- 張東翼『モンゴル帝国期の北東アジア』(汲古書院、2016):「a 金方慶の生涯と行蹟」「b モンゴルに投降した洪福源および茶丘の父子」「c 14世紀の高麗と日本の接触と交流」
- 南基鶴「蒙古襲来以後の日本と東アジア」(同『蒙古襲来と鎌倉幕府』臨川書店、1996)
- 南基鶴「蒙古襲来と高麗の日本認識」(大山喬平教授退官記念会編『日本国家の史的特質』思文閣出版、1997)
- 南基鶴(村井章介訳)「高麗と日本の相互認識」(科研報告書『グローバル化の歴史的視点に関する学際的研究』2003、立教大学文学部)
- 馬場久幸『日韓交流と高麗版大藏経』(法蔵館、2016)
- 浜中昇「高麗末期倭寇集団の民族構成」(『歴史学研究』685、1996)
- 原美和子「宋代東アジアにおける海商の仲間関係と情報網」(『歴史評論』592、1999)
- 原美和子「勝尾寺縁起に見える宋海商について」(『学習院史学』40、2002)
- 原美和子「宋代海商の活動に関する一試論」(小野正敏ら編『考古学と中世史研究3 中世の対外交流』高志書院、2006)
- 藤田明良「「蘭秀山の乱」と東アジアの海域世界—14世紀の舟山群島と高麗・日本」(『歴史学研究』698、1997)
- 藤田明良「9世紀～16世紀の黒山島と朝鮮国家—東アジア国家の島嶼支配に関する覚書」(『新しい歴史学のために』230・231、1998)
- 藤田明良「東アジア世界のなかの太平記」(市沢哲編『太平記を読む』吉川弘文館、2008)

- 保立道久「院政期の国際関係と東アジア仏教史—上川通夫・横内裕人氏の仕事にふれて」（同著『歴史学をみつめ直す—封建制概念の放棄』校倉書房、2004）
- 溝川晃司「日麗関係の変質過程—関係悪化の経緯とその要因」（『国際日本学』1、2003）
- 村井章介「1019年の女真海賊と高麗・日本」（『朝鮮文化研究』3、1996）→同『日本中世の異文化接触』（東京大学出版会、2013）
- 村井章介「倭寇の多民族性をめぐって—国家と地域の視点から」（大隅和雄・村井章介編『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社、1997）→同『日本中世世界史論』（岩波書店、2013）
- 村井章介「大智は新安沈船の乗客か」（『日本歴史』694、2006）→同『日本中世の異文化接触』（東京大学出版会、2013）
- 村井章介「倭寇とはだれか—14～15世紀の朝鮮半島を中心に」（『東方学』119、2011）→同『日本中世世界史論』（岩波書店、2013）
- 森公章「古代日麗関係の形成と展開」（『海南史学』46、2008）→同『成尋と参天台五臺山記の研究』（吉川弘文館、2013）
- 森平雅彦「牒と咨のあいだ—高麗王と元中書省の往復文書」（『史淵』144、2007）→同『モンゴル覇権下の高麗—帝国秩序と王国の対応』（名古屋大学出版会、2013）
- 森平雅彦「日麗貿易」（大庭康時等編『中世都市・博多を掘る』（海鳥社、2008）
- 森平雅彦『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』（山川出版社 世界史リブレット、2011）
- 森平雅彦「高麗・朝鮮時代における対日拠点の変遷」（『東洋文化研究所紀要』164、2014）
- 森平雅彦「モンゴルの日本侵攻と高麗における軍需調達問題」（『年報朝鮮学』18、2015）
- 山本光朗「元使趙良弼について」（『史流』40、2001）
- 横内裕人「高麗統歳経と中世日本—院政期の東アジア世界観」（『仏教史学研究』45-1、2002）→同『日本中世の仏教と東アジア』塙書房、2008）
- 横内裕人「遼・高麗と日本仏教—研究史をめぐって」（『東アジアの古代文化』136、2008）
- 李鍾黙（桑嶋里枝訳）「朝鮮前期韓日文学交流の様相について」（『朝鮮学報』182、2002）
- 李領「中世前期の日本と高麗—進奉関係を中心として」（『（東京大学地域文化研究会）地域文化研究』8、1995）→同『倭寇と日麗関係史』（東京大学出版会、1999）第二章
- 李領『倭寇と日麗関係史』東京大学出版会、1999）：「a 院政期の日本・高麗交流に関する一考察」「b 「元寇」と日本・高麗関係」「c <庚寅年以降の倭寇>と内乱期の日本社会」「d 高麗末期倭寇の実像と展開—『高麗史』の再検討による既往説批判」
- 李領「「庚申年の倭寇」の歴史地理学的検討—鎮浦口戦闘を中心として」（『シリーズ港町の世界史1 港町と海域世界』青木書店、2005）
- 李領「14世紀における東アジアの国際情勢と倭寇—恭愍王15年（1366）禁倭使節の派遣をめぐって」（科研報告書『中世港湾都市遺跡の立地・環境に関する日韓比較研究』2008a）
- 李領「<庚寅年以降の倭寇>と松浦党—禍王3年（1377）の倭寇を中心に」（同上、2008b）
- 渡邊誠「平安貴族の対外意識と異国牒状問題」（『歴史学研究』823、2007）
- 渡邊誠「国際環境のなかの平安日本」（大津透編『撰関期の国家と社会』山川出版社、2016）

Historical Research on the Japan-Goryeo Relations in Japan : 1992—2016

MURAI Shosuke

An international symposium on the recollection and prospects of historical research on the Korea-Japan relations was held in Chuncheon, South Korea, on September 16, 2017, to commemorate the 25th anniversary of the Korea-Japan Historical Society, in which I was one of the keynote speakers. This article is a slightly revised version of the treatise on which the speech was based. The research trends over the last 25 years, taking into account each of the treatises presented, can be summarized as follows:

The research on diplomatic documents exchanged between Japan and Goryeo dramatically developed particularly in the studies of Wokou (Japanese pirates) in its early stage, the Yuan Dynasty's invasions of Japan, and Wokou after the Kanoe-no-tora year (AC1350). In connection to this, prospects of changes in the formats of diplomatic documents and advance in the comprehension of diplomatic documents also draw attention. The process of making active efforts to discover new historical materials and reexamine known records, from which a new image of history forms, is exceptionally remarkable.

Studies placed not only in the bilateral perspective, but more broadly in eastern Eurasia, include one that finds activities of the Khitan people behind the Japan-Goryeo relations in the late Heian period and one that focuses on the activities of Southern Song that attempted to destruct the interaction of Yuan and Goryeo with Japan. This area of research, however, is still at the beginning stage. Research on the history of sea areas and maritime exchange include a study on Song traders who acted as intermediaries, one that focuses on the roles of Islets, and one that considers Wokou and Japanese as marginal people. This area of study, however, has been somewhat stagnant in recent years.

Analysis of the mutual recognition of Japan and Goryeo includes a report that argues the variation of perception due to changes in the international environment and one that points out the attitude of Buddhists who tend to ignore each other. Exploration of the historical resources on Buddhism will become the future basis of this research.

It is increasingly important to know the site where an incident took place before reading a historical document on such an incident. Such an attitude is evident in such studies of the transition of Goryeo's locations of external communication and active surveys of the sites of Wokou activities. I hope that the narrow strips of wood discovered in the ships of the Goryeo period, which were sunken in the southwestern coastal waters of the Korean Peninsula, will pave the way for the perspective of comparing Japan and Goryeo from the angle of social economy.